

Janet March にみる Floyd Dell の女性観 — 結婚・出産・仕事の描写からの考察

小林 亜由美

1. はじめに

Floyd Dell (1887-1969) は生涯に 11 の小説を残した。デルが発表した最初の小説は 1920 年に出版された自伝的小説 *Moon-Calf* である。次作 *The Briary-Bush* (1921) も自伝的な内容で、主人公は男性である。しかし、1923 年に出版された 3 作目の *Janet March* (以下 JM と略記) の主人公は女性で、その主人公 Janet の幼少期から結婚までが描かれている。デルはこの JM で家父長制の崩壊を描いたと自伝 *Homecoming* で述べている (362)。ジャネットは従来のヴィクトリア朝的な女性像からはかけ離れた、自由奔放な女性として描かれており、その女性像には作者デルの女性観が投影されていることが考えられる。

Simmons は JM について、フラッパーの結婚について描かれた作品であるが、モダンな様子と男性支配が見られる作品であると述べ (41)、また、Hart は、デルが女性の自由について考察することは、デル自身の自由への要求の考察でもあると指摘している (42)。¹ しかし、デルは JM の中で、女性が社会で活躍すること、つまり、女性が仕事を持つことを描こうとしていたのではないだろうか。

デルは JM 出版前の 1913 年に出版された *Women as World Builders* (以下 WWB と略記) で、Charlotte Perkins Gilman、Jane Addams、Emmeline Pankhurst、Olive Schreiner、Isadora Duncan、Beatrice Potter Webb、Emma Goldman、Margaret Dreir Robins、Ellen Key、Dora Marsden の 10 人の女性について論じている。デルはこの作品の中で、社会で活躍した “the worker type” に関心を寄せていると述べており、女性が社会で活躍することを期待している。本稿では JM を、デルが活動家の女性について論じた WWB におけるデルの女性観に照らし合わせ、JM に見られるデルの女性観を結婚・出産・仕事の描写に注目して考察する。

2. *Women as World Builders* に見られるデルの女性観

まず、デルが女性についてどのような考えを持っていたのかを *WWB* から考察する。*WWB* は 1913 年に発表されたデルの最初の本で、10 人の女性について *Friday Literary Review* に寄稿したエッセイを編集したものである (Hart 42)。デルは *WWB* で 10 人の女性について各個人の経歴の紹介をするが、女性を以下のように 3 つに分類している。

There are some women who find their destiny in the bearing and rearing of children, others who demand independent work like men, and still others who make a career of charming, stimulating, and comforting men. These types, of course, merge and combine; and then there is that vast class of women who belong to none of these types – who are not good for anything!

The first of these types may be called the mother type, the second the worker type, and the third – the kind of women which is not drawn either to motherhood or to work, but which is greatly attracted to men and which possesses special qualities of sympathy, stimulus, and charm, and is content with the more or less disinterested exercise of these qualities – this may without prejudice be called the courtesan type. (*WWB* 10-11)

第 1 の分類は出産と育児に専念する女性で、デルはこれを “the mother type” と呼び、第 2 の分類は男性のように独立した仕事を求める女性で、“the worker type” と呼んだ。そして彼はいずれにも属さず、男性を魅了する女性を “the courtesan type” と呼び、第 3 の分類とした。デルが *WWB* で論じた女性は社会で活躍する “the worker type” で、彼女たちの活躍についてデルは “they give me the quality of the woman’s movement today” (*WWB* 8) と関心を示す。*WWB* での主な関心事は女性の可能性である (*WWB* 18)。デルが *WWB* で取り上げた女性は先述の 10 人で、いずれも社会で活躍した “the worker type” である。まず、これらの 10 人の女性について、デルが *WWB* で述べている内容を紹介する。

Charlotte Perkins Gilman は、*Women of Economies* の著者で、その他にも詩集を出版したり、編集者として活動したりした女性である (22)。ギルマンが子どもを持つ女性の仕事の可能性について考察し、母親であることと同様にひとりの人として生きることが大切であると考えていることにデルは注目し、ギ

ルマンがひとりの人として生きることを実行した人物であるとデルは述べている (24,28)。²

Emmeline Pankhurst は、イギリスの婦人参政権活動家で、パンクハーストが参政権を求めて闘うことをデルは “we (males) shall have an opportunity to fight in earnest at the side of the Valkyrs” (40) と述べ、その活動を歓迎している。Jane Addams について、友好状態の感情を持つ女性とデルは述べている (32)。この二人に関して、WWB で結婚や出産についての言及はなく、彼女たちの仕事の経歴について述べられている。パンクハーストは “fighter” で、アダムズは “conciliator” であるとデルは述べている (33)。³

Olive Schreiner は著書の *Women and Labor* で、女性をあらゆる経済活動の場所へ送ることを述べているとデルは言う (42)。また、Isadora Duncan はダンスで新しい世界を開いた女性として紹介され、シュライナーとダンカン は身体と魂の自由を表現したとデルは述べている (43)。⁴ Beatrice Webb は社会状況の調査に従事しており、その調査の対象の中に Emma Goldman がいた (55)。ビアトリスは労働者階級に混ざって、その実態を調べ、*Life and Labor People* を発表した (53)。ビアトリスは社会主義団体であるフェビアン協会に所属し、1892年に Sidney Webb と結婚して、ウェブ夫人と呼ばれるようになった (53-54)。デルはこの二人の経歴を対称的な関係にあると考える (52)。ゴールドマンは厳しい労働条件での就労に疑問を持ち、社会主義やアナキスト運動に傾倒していく (56)。自由や独立を求めるゴールドマンは出産を拒否することがそれらを達成するために必要であると考えたことをデルは紹介している (61)。

Margaret Dreier Robins は National Women's Trade Union League⁵ で、女性の労働条件の改善について功績を残した女性として WWB で紹介され、アメリカ女性の理想であるとデルは考える (65)。また、デルは Ellen Key について、自由の必要性を説き、男女の恋愛が究極の目的であることを述べた人物として紹介している (81)。しかし、ケイには保守的な面があり、母性を重視しているということにデルは言及し (84)、女性は男性よりも人間の価値を守る確かな本能を持っていると結論付ける (89)。

WWB で最後に紹介されているのは Dora Marsden である。デルはマースデンをフェミニスト運動の新しい人物として取り上げ、自由を好み、週刊ジャーナル *The Freewoman*⁶ でフェミニズムについて述べた人物であると紹介している (90-91)。また、マースデンは自立することは社会的成功を意味すると思えるが、母性と成功との関係に苦悩したとデルは述べている (91)。女性は子ども

もを持つべきであるとマースデンは考え、女性が男性と同等になるためには、人生を諦めずに子どもを持つ方法を見つけなければならないと考えた (97-98)。

以上のようにデルは 10 人の女性を “the worker type” の女性としてそれぞれの社会における活躍を紹介し、女性が経済的に自立することや自由になることは社会で活躍することで実現できることを述べている。しかし、ギルマン、ウェブ、ゴールドマン、ケイ、マースデンの 5 人についてはそれぞれの結婚や出産についての見解が言及されており、女性が仕事をして経済的に自立したり、自由になったりすることは、結婚や出産にどのように向き合うかを考えなければならないことを示唆している。デルは社会で活躍することを歓迎し、そうすることで女性が自由を獲得できると結論付けたが (104)、女性の結婚や出産と仕事の両立については述べていない。

3. ペネロピーの結婚・出産・仕事に対する見解の描写

WWB において社会で活躍する女性を論じたデルは、女性を主人公にした JM で女性をどのように描いたのだろうか。JM には主人公ジャネットの他に、その母親の Penelope の描写も詳細に見られ、結婚や仕事、出産についての描写がある。まず JM の主人公ジャネットの母親であるペネロピーについての描写を考察する。

ペネロピーはジャネットの父親 Bradford との結婚にあたり、次のように考えていた。

And it was true that Penelope had been afraid, not of having children, but of having a child every year, like her mother. She was afraid of having her ambitions, her hopes, her dreams, utterly destroyed by the relentless and endless process of childbearing. (JM 54)

ペネロピーの母親は、毎年子どもを産んでおり、ペネロピー自身は母親のように毎年子どもを産むことになると、そのことにかかりきりになって自分の望みが壊れてしまうことを懸念する。また、“women can be married, and have careers too!” (JM 54) と述べており、結婚をしても仕事を持つことを希望している。

また、結婚前にペネロピーが望んだ仕事である教職について、本当に希望する仕事かどうかを自問自答すると、“Teaching hadn’t been a career—it had been only a way of putting off marriage a little longer.” (JM 54) と、結婚を延期するための理由にすぎず、“She was going to be Brad’s wife. That was her

career.” (JM 55)と、ブラッドフォードの妻になることがペネロピーの「職業」であるとされている。そして、ペネロピーはジャネットの兄にあたる子どもを出産すると、その子どもを育てることに喜びを感じ始める。当初は結婚・出産を躊躇していたペネロピーであるが、実際に結婚と出産をすると、“It was fun, seeing him grow up, year by year!” (JM 55) と、その生活に喜びを見出している。また、“Still—her [Janet’s] mother hadn’t found marriage tiresome.” (JM 153) と描写されており、ペネロピーは結婚に充実感を得ている。

仕事を持つことを希望していたペネロピーであるが、実際に結婚と出産・育児を経験すると、ペネロピーはブラッドフォードの妻であることが「職業」であると考え。ペネロピーが母であることに喜びを見出していることは、ケイやマースデンが母性の重要性を説いていることと重なる。ペネロピーが妻であることを「職業」と考える描写や、以前に抱いた仕事への憧れを育児に向け、結局母としての役割を選択して充実感を得たということから、デルが母性を重視していることが分かる。

このように、ペネロピーには仕事をしたいと考えるフェミニズム的な描写と、育児に喜びを見出す母性的な描写がみられるが、19世紀後半から20世紀初頭の第1波フェミニストたちの多くは参政権獲得運動だけでなく、働く母と子どもの社会福祉のための改革運動に関わり (DuBois 145)、母性とフェミニズムの主張が共存していた。そして第1波のフェミニストは母性を女性解放のイデオロギーとして取りこみ、そのことで母性を女性の天職と信じる多くの女性たちの支持を得た (山内 27-28)。ペネロピーがブラッドフォードの妻であることを仕事と考えたという描写は、母性とフェミニズムが重なりあう描写と考えられ、デルは母性とフェミニズムを共存させることで、従来のヴィクトリア朝的な慣習⁷である、妻になり母になることに社会的な意義を持たせようとしたのだと考えられる。

4. ジャネットの結婚・出産・仕事に対する見解の描写

次に JM の主人公ジャネットの結婚、出産、仕事に関する描写を考察する。ジャネットは幼少期から描かれており、活発に行動する女の子として描かれている (JM 73-74)。ジャネットの両親のジャネットに対する育児は、保守的な考えを持つジャネットの祖父 Andrew が忠告をするほど自由であった。

Janet’s grandfather, Andrew March, had once criticized the manner of her upbringing. He had come on one of his rare visits to Winga Bay, and

seen little Janet swimming and playing on the beach, had seen her tramp in with flushed face and enormous appetite to meals, had seen her carried away in tired sleepiness to bed. And his comment on this healthy childhood had been: "It's all right as far as it goes."

"What's lacking?" his son had demanded.

"Well," said old Andrew, "it would be a good life for a young animal."

"But aren't children young animals?" Bradford asked, laughing.

"I was brought up to think of them as immortal souls," said Andrew.

"We're not worrying about Janet's soul," said Bradford. (JM 86-87)

ジャネットの祖父アンドリューはジャネットが泳いだり、海岸で活発に遊んだりするのを見て、成長した時のジャネットを心配する。しかしジャネットの父ブラッドフォードは子どものジャネットが活発であることを自然な現象と考え、アンドリューの言葉を気にかけていない。

自由で活発に育ったジャネットは、高校生になると従姉妹の誘いでパーティーに出かけるようになる。ジャネットはパーティーで酒やたばこや恋愛を経験するが、飲酒の量やたばこの吸いかたを決めている。

Now they all smoked, with an air of having always done it. Janet smoked, too, but drew line on grounds of health at inhaling. She was still proud of her health and strength, and intent on keeping her body fit. She had made rules for herself about tea and coffee and candy; so it was simple enough to make rules concerning cigarettes and cocktails. Her rule for cocktails was one in an evening; and if there was any wine, only one glass. (JM 119)

ジャネットは他の女の子と同様にたばこを吸うものの、それをふかすだけで、煙を吸い込んではいない。さらにジャネットは健康であることに誇りを持っており、紅茶やコーヒーやキャンディーの量を決めていたように、カクテルやワインの量を決めている。パーティーに出かけ、たばこを吸い、酒を飲んで男性との時間を楽しむ享樂的な時間を過ごしながら、ジャネットは自分に規範を設けており、1920年代のアメリカに見られたフラッパー⁸の要素と従来の保守的な慣習とが混在している。

結婚についてジャネットは、時期が早い結婚に対して消極的で、また、"Probably I shall not marry for love." (JM 98) と、恋愛のための結婚を否定して

いる。友人たちが早く結婚することに対し、彼女は “I think it is a mistake to marry too young.” (JM 98) と考え、“But I wish to have children.” (JM 98) と考え、また、子どもを持つ心構えがなければ結婚はできないとジャネットは考えている (JM 122-123)。彼女は結婚と出産を密接に考えており、結婚は子どもを持つためにすると考えているのである。しかし “she wanted to have babies some time—but that wasn’t the whole life, surely!” (JM 152) と考えており、子どもを持つことが人生のすべてであるとは考えていない。その点は母親のペネロピーと共通している。

ペネロピーは結婚をしても仕事を持つことを重視していたが、ジャネットも仕事を持つことについて、高校時代に大学卒業後の計画を立てている。

When she had finished college she was going to leave home and go to Chicago to earn her living. She had her life all planned, for years ahead. She wasn’t going to marry, at least for many years—not until she was thirty. She had decided that she did not care much for men. She was going to devote her life to some serious purpose—perhaps teaching. She had never been exceptionally good in her studies, but now she was going to be different. (JM 96)

ジャネットは家族のもとを離れて自分で生計を立てることを計画し、卒業後すぐに結婚をすることは視野に入れていない。結婚をする周囲の人に対して “People get married very young.” (JM 97) と日記に書いており、自由に育ったジャネットには、結婚をして、しとやかに生きるという従来的女性としての選択肢はない。

大学生になったジャネットは相変わらずパーティーを楽しむ一方、かつて描いた大学卒業後の人生計画について思い出し、自分の将来について考える。

She felt again her adolescent idealism about usefulness, tinged now with a sense of adventure. She had been an idler long enough. She would go into the world of work and find something there worth doing. At first, she told herself, her work wouldn’t be anything important; but it would at least serve to show what stuff she was made of. (JM 128)

ジャネットは自分が怠けすぎていると感じており、社会で価値のある仕事を見つけようとする。“What she wanted was work.” (JM 128)と、ジャネットは仕事に情熱を注ぐことを決め、求人広告を見るが、その中に掲載されていた、帳

簿係の助手、清掃係り、販売員、電話交換手、ウェイトレスといった仕事は “It was obvious to Janet that she couldn’t be most of these things, and equally obvious that she did not want to be most of the others. She couldn’t be an assistant book-keeper or a cook; she didn’t want to be saleslady, a telephone operator, or a young girl to answer ‘phone” (JM 129) と描写されており、なかなか適職が見つからない。それでも、ジャネットは自力で仕事を見つけたいと考え、本屋での仕事を見つける (JM 130)。しかし、実際に働いたジャネットは仕事に対して、“Work hadn’t been what she had hoped it would be. It wasn’t an adventure. It wasn’t thrilling. It wasn’t beautiful. It was petty. It was absurd. It was bore.” (JM 147) と感じる。ジャネットが自力で仕事を見つけようとしていることは女性の経済的な自立への第一歩を歩もうとしていることで、能動的に求職をしていないペネロピーの仕事に対する考え方からの進歩が見られるが、実際に仕事をしたジャネットはそれを退屈に感じており、仕事することに満足が得られていない。ここに女性が仕事で社会的な自立をすることの難しさを読み取ることができる。

その後、ジャネットは “Wasn’t there anything else, except marriage and work?” (JM 153) と、結婚と仕事以外の人生の目的を探す。ジャネットは早く結婚することに消極的で、また、仕事することに価値を見いだせずにはいたが、妊娠を機に新たな考え方を見出す。ジャネットは、文学に関心のある Paul Richard、芸術家の Vincent Blatch との恋愛を経験した後、最終的に Roger Leland との子どもを身ごもり、結婚を決意する。ロジャーに妊娠を打ち明けたジャネットは、身ごもったことに関して次のように話す。

“All my life I’ve wanted to do something with myself. Something exciting. And this is one thing I can do. I can—” she hesitated—“I can help create a breed of fierce and athletic girls, new artists, musicians, and singers—” (JM 456)

結婚と仕事以外で情熱を注ぐことができる何かを探していたジャネットは、妊娠したことに喜びを得ている。妊娠によって、活動的な女性を育てられることにジャネットは喜びを見出したのである。

5. 結論 — Janet March におけるデルの女性観

ここで注目したいのは、ジャネットの妊娠に対する発言がアメリカの独立建国期に見られる共和国思想に通じる「共和国の母」を思い起こさせることであ

る。「共和国の母」のイデオロギーは母である女性が市民である夫や未来の市民である息子を育てる「男性」への奉仕であり (Kerber 229)、ジャネットが思い描いたような仕事をする自立した「女性」を育てることはその範疇にはないが、ジャネットが実現できなかつた自立を自身の女の子の子どもに託す描写は、デルが「共和国の母」の思想を女性と仕事についての仕事の見解のために応用したものと解釈できる。ジャネットは結婚や仕事に魅力を見出せなかつたが、妊娠によって個人を犠牲にしながらも、“I can help create a breed of fierce and athletic girls, new artists, musicians, and singers—” (JM 456) と、活発な女の子を産み育てるという役割を担うことに喜びを得ている。JM で仕事をすることを希望したがそれに喜びを見出せなかつたジャネットが、母になることを喜び、女の子を育てることを考える描写には、仕事への情熱を子育てに向け、女性が仕事をするというフェミニズムの主張と、子育てという母性の主張が共存している。デルがペネロピーやジャネットに仕事をさせる描写をせずに、母として生きることを決意させる描写をしたことは、WWB で “the worker type” の女性に関心を寄せていることと矛盾する。この矛盾は、女性が社会で活躍することを理想としているものの、実際は困難であるというデルの見解を表すものと考えられる。この困難に対し、デルは「共和国の母」のイデオロギーに依拠して、“the mother type” の女性を “the worker type” の女性に近づけて描写することで、この矛盾を解決しようとした。デルは女性が社会で活躍することを望んでいたが、その理想の実現は困難だったため、理想の実現を次世代において可能にする存在として女性を描き、その重要性を示そうとしたのである。

註

- 1 シモンズは JM をフラッパー女性の結婚の観点から論じ、ハートはデルが女性の自由獲得に自身の自由への希望を重ねたと分析を行っているが、シモンズもハートも母性と仕事の視点からの分析はない。
- 2 ギルマンは 1884 年に結婚し、妊娠・出産と幸せの絶頂にいるはずであったが、出産後にまもなく精神的に病んだ (富島 2)。そのことでギルマンの結婚は離婚に至った (スペンダー 101-103)。妊娠を知った時、母親としての責任よりも、自分の仕事を優先させ、そのことが世間の非難の対象になった (スペンダー 105)。ギルマンは後に再婚し、その結婚では仕事と家庭の両立を可能にした (武田・緒方・岩本 290-293)。
- 3 パンクハーストの娘も婦人参政論者として活動しており (Winslow 13)、エメリンは結婚・出産と仕事を両立させた女性であることが分かる。

- 4 シュライナーは結婚して出産をするが、その子どもは数時間後に亡くなり、終生その精神的打撃から立ち直ることができなかった（スペンダー148）。また、ダンカンは無婚で出産をしている（ブレア 134）。
- 5 National Women's Trade Union League については Jacoby がその成立過程を説明しており、そこでのロビンスの活躍についても言及している。
- 6 *The Freewoman* については、Clarke 参照。
- 7 ヴィクトリア朝的な慣習について、エヴァンズ参照（265）。
- 8 フラッパーについてはエヴァンズ（285）、本間（103）McGovern（322、325）参照。

文献

- ブレア、フレドリカ『踊るヴィーナス—イサドラ・ダンカンの生涯』鈴木万理子訳。Parco 出版局、1990年。Print.
- Clarke, Bruce. "Dora Marsden and Ezra Pound: 'The New Freewoman' and 'The Serious Artist'." *Contemporary Literature* 33 (1992): 91-112. Print.
- Dell, Floyd. *Homecoming: An Autobiography*. 1933. Port Washington, N.Y.: Kennikat, 1969. Print.
- . *Janet March*. New York: Knopf, 1923. Print.
- . *Women as World Builders: Studies in Modern Feminism*. 1913. Westport, Conn: Hyperion, 1976. Print.
- Dubois, Ellen Carol and Vicki L. Ruiz, eds. *Unequal Sisters: A Multicultural Reader in U.S. Women's History*. New York: Routledge, 1990. Print.
- エヴァンズ、サラ・M『アメリカ女性の歴史—自由のために生まれて』第2版小檜山ルイ、竹俣初美、矢口祐人、宇野知佐子訳。明石書店、1997年。Print.
- Gilman, Charlotte Perkins. *Women and Economics: A Study of the Economic Relation between Men and Women as a Factor in Social Evolution*. Boston: Small, Maynard, 1913. Print.
- Hart, John E. *Floyd Dell*. New York: Twayne, 1971. Print.
- 本間長世編『新しい女性像を求めて』論評社、1977年。Print.
- Jacoby, Robin Miller. "The Women's Trade Union League and American Feminism." *Feminist Studies* 3 (1975): 126-140. Print.
- Kelly, Gary and Edd Applegate, eds. *British Reform Writers 1831-1914*. Detroit: Gale, 1998. Print. Dict. of Lit. Biog. 190.
- Kerber, Linda K. *Women of the Republic: Intellect and Ideology in Revolutionary America*. North Carolina: U of North Carolina P, 1980. Print.
- Koven, Seth and Sonya Michel. "Womanly Studies: Maternalist Politics and the Origins of Welfare States in France, Germany, Great Britain, and United States, 1880-1920." *American Historical Review* 95 (1990): 1076-1108. Print.
- Martine, James J., ed. *American Novelists 1910-1945*. Detroit: Gale, 1981. Print. Dict.

of Lit. Biog. 9.

McGovern, James R. "The American Woman's Pre-World War I Freedom in Manners and Morals." *Journal of American History* 55 (1968): 315-333. Print.

Nadel, Ira B. and William E. Fredeman, eds. *Victorian Novelists after 1885*. Detroit: Gale, 1983. Print. Dict. of Lit. Biog. 18.

Simmons, Christina. *Making Marriage Modern*. New York: Oxford UP, 2009. Print.

スペンダー、デイル『フェミニスト群像』原恵理子訳。勁草書房、1987年。Print.

武田貴子、緒方房子、岩本裕子『アメリカ・フェミニズムのパイオニアたち—植民地時代から1920年代まで』彩流社、2001年。Print.

富島美子『女がうつる—ヒステリー仕掛けの文学論』勁草書房、1993年。

Winslow, Barbara. "The Most Prominent Suffragette." *Women's Review of Books* 20 (2003): 13-14. Print.

山内恵『不自然な母親と呼ばれたフェミニスト—シャーロット・パーキンズ・ギルマンと新しい母性』東信堂、2008年。